

全体会総括

コーディネーター：谷亮治氏



はじめに

先に白状しておく、私は青少年の育成や福祉といったテーマについては門外漢です。私の専門は「コミュニティ」というもので、例えば住民参加のまちづくり活動などをフィールドに研究・実践する日々を送っています。そんな私が、不思議なご縁を頂き、青少年及びその支援者向けのシンポジウム「動き出す、わたしのワカモノガタリ」においてパネル・ディスカッションのコーディネーターを仰せつかることになりました。

正直、専門外の私に本シンポジウムでどこまでできるかわかりませんでした。しかし、企画会議に参加してユースワーカーの方々と語り合ったり、パネリストの皆さんの経験を聞いたりするうちに、青少年にとって今ビビッドな問題は、コミュニティの問題ともつながっていることを教えていただきました。

その後、本パネル・ディスカッションを総括する原稿を依頼されました。それが本稿です。当日の詳細な振り返りは別添の記録を参照していただくとして、本稿では、私がこのパネル・ディスカッションに企画段階から当日まで関わることで得た知見を解説し、これを踏まえた提言を記録することとします。

青少年の問題

自己表現を抑圧しなければ首尾よく乗り越えていくことができない関係

さて、先ほど青少年にとってビビッドな問題は、コミュニティの問題ともつながっていると書きました。それはどういうことでしょうか。

本書の巻頭言にはこのように書かれています。

彼ら／彼女らはほとんどの場合、自分のことを深く語ることを避けているように感じるのです。自分のことを話す他の人が迷惑がるのではないかと「引いてしまう」のじゃないか、うっとうしいと思われるんじゃないか、などと一線を互いに引いているように思えます。そして、結局、自分のことを語らないのです。その究極はこんな言葉に表れています。

「私は就活で、嘘をつくことを覚えました。」

ここに見られるのは、青少年が、友だち付き合いにせよ就職活動にせよ、自己表現を抑圧しなければ首尾よく乗り越えていけないような息苦しい関係に日々さらされている、という構図です。これが、企画者が理解する、青少年の問題のあり方です。

コミュニティとは何か

自分の思う「望ましさ」を実現するのに、最も適当な「他人との集まり方」

では、この問題は私の専門であるコミュニティの問題とどうつながってくるのでしょうか。まず、コミュニティについて簡単に説明します。

コミュニティとは多義的な言葉で、専門家の間でも解釈が分かれています。ただ、日本のコミュニティ政策の歴史を見るに、地域社会での人々の集まり方の理想像を指す期待概念である、という解釈はある程度定説化しているようです。ここでは、コミュニティを「他人との望ましい集まり方」と仮定して話を進めましょう。

さて、この仮定を置く場合、当然次のように問われるでしょう。「じゃあ、どういう状態が望ましいの？」。

その答えは「あなたが“何を望ましいと設定するか”による」にほかなりません。「望ましさ」は自分の意識を離れて、国家や専門家が決めてくれるわけではないのです。自分自身で「決める」ものなのです。しかし当然ながら、ただ放っておくだけでは自分の思う「望ましさ」は実現しません。だからこそ、人は自分の思う「望ましさ」を実現するのに、最も適当な「他人との集まり方」を自分でデザインして生きていくのです。

これを地域社会で、そこに住む人々自ら思索・実践していくのが、私が日々関わっている「住民参加のまちづくり活動」だということができるでしょう。これがコミュニティに関する私の解釈です。

青少年の問題をコミュニティの観点から読み解く

では、このコミュニティの問題は、青少年の問題といかにつながっていくのでしょうか。

先程も記したように、コミュニティの問題とは、自分がどういう生き方をしたいか、そのためにどんな人と、どんな風に関係を作っていくか、という問題です。一方、青少年は「自己表現を抑圧しなければ首尾よく乗り越えていくことができない息苦しい関係」に悩んでいると書きました。これを、青少年が、これを望ましい状態ではない、つまり「他人と望ましい関係を築けていない」ということと理解するならば、すなわち青少年がコミュニティを作れていないという問題だといえそうです。そう、ここで青少年の問題とコミュニティの問題がつながるのです。

たにりょうじ
谷亮治氏

- ・京都市まちづくりアドバイザー
- ・同志社大学社会学部 嘱託講師
- ・まちづくり研究会「まち飯」理事